

松戸も揺るがした 幕末維新の神仏分離令

image illustration

江戸時代の末期、いわゆる幕末の動乱期から、明治政府が成立する間に、政府の主導によって実施されたのが「神仏分離」です。宗教的主宰者と政治権者が同じ者になる「祭政一致」を目指して行われ、かつての神武天皇の時代のような、天皇を中心とする政治体制に戻そうとした。結果的には、近代化の流れに逆らうことはできず、新政府のこの政策はつまづくことになりましたが、日本各地の寺社は大きな影響を受けました。松戸も例外ではなく、この「神仏分離令」によって、いくつもの寺社がその様子を变えることになりました。

「神仏習合」から

「神仏分離」へ

仏教は朝鮮半島から伝わり、かの聖徳太子の後押しもあって、ゆるやかに日本各地へと広がっていききました。日本には古来より民族宗教である「神道」がありましたが、自然に従う自然道を旨とする神道に対して、經典という言葉で考える仏教は人間道ともいえるものだったことから、神道の「神」と、仏教の「仏」はともに崇敬されるようになり、神道の考え方が「和」であることもあって、無理なく「神仏習合」の状態にあったのです。こうした神と仏の対等とも言える関係に変化が生じてきたのは奈良時代になってからです。国家から保護され始めた仏教は、平安時代の初めになると、日本の八百万（やおよぼす）の神は仏の化身だとする「本地垂迹（ほんじすいじゃく）」と呼ばれる説が現れたことにより、神道よりも起源が古いと見られるようになり、もともとあった

この「神仏習合」の形を本来のあり方に戻そうというのが「神仏分離」です。江戸時代にはすでにその動きがあり、会津藩や水戸藩などでは実際に行われました。会津藩では、神社から仏像や仏具が除かれ、古い神社は再興されました。水戸藩では、「水戸黄門」として知られる徳川光圀が寺院整理で領内の約三割を破却しました。同時に、一村一社制を基本に神社の整理も行われました。

この「神仏習合」の形を本来のあり方に戻そうというのが「神仏分離」です。江戸時代にはすでにその動きがあり、会津藩や水戸藩などでは実際に行われました。会津藩では、神社から仏像や仏具が除かれ、古い神社は再興されました。水戸藩では、「水戸黄門」として知られる徳川光圀が寺院整理で領内の約三割を破却しました。同時に、一村一社制を基本に神社の整理も行われました。



②小金 日枝神社

こうして諸藩での「神仏分離」を全国規模で実施したのが明治維新の新政府です。「神仏習合」という信仰形態を改めることで、かつて神武天皇が行っていたとされる「祭政一致」の復古を目指しました。

「山岳信仰の「権現」は廃止

神仏分離令では、「権現（ごんげん）」を名乗る神社に対して、仏像を御神体としないように求め、いわゆる「神仏混淆（しんぶつこん

「山王社」と呼ばれるようになり、本地垂迹説が現れると「山王権現」として延暦寺と一体となつて社殿に仏像がまつられたり、僧侶が神前で読経したりする光景が当たり前に見られるようになりました。

このように神仏習合の代表のような山王権現でしたから、すぐに神仏混淆禁止の対象となり、仏像や経典、仏具がすべて撤去され、「山王権現」は「日吉神社」や「日枝神社」と改められました。



①小金 八坂神社